

「神々の夫婦げんか」のお話

2021/12/14



寒い日がつづきます。今週末の12月18日（土）はオペラサロンの《ワルキューレ》第2回です。暖かくしてお出かけください。先回は、第1幕の終わりの「愛の二重唱」の途中まで観ていきました。今回もまた、「愛の二重唱」から始めます。このときの示導動機【15：ジークムントの愛の歌「春の魅惑」】は、これまでになんどもその断片が出てきた【8：ジークリンデの動機】が遂に美しく完成された「アリアのメロディ」となったものです。見事です。

この歌のあとでジークムントとジークリンデは情を通じたものと思われま。ジークリンデのお腹にはジークフリートが宿ることになるからです。でも、心配が一つあります。ジークリンデはフンディングの妻です。ジークリンデのお腹の子はひょっとするとフンディングの子かも知れないからです。なぜなら、ジークフリートは、ジークムントと違って、フンディングのように、好戦的で、好色で、功利的で、いささか軽薄なところがあるからです。みなさまは、「それなら、DNAで検査したら」と仰るでしょうが、ジークムントとジークリンデは双子の兄弟なので、DNA判定でもめるでしょう。（笑

い)

ついで、第2幕は、ヴォータンと妻のフリッカの「神々の夫婦喧嘩の場」です。ヴォータンは指環を手に入れることばかり考えています。もし、ニーベルング族のアルベリヒに指環を奪われたら、たちどころに神々の王国は滅びてしまいます。ヴォータンは、そのために人間の女にジークムントを生ませて指環奪還を狙ったのです。それに関知せず、嫉妬した妻のフリッカは、結婚の神でもあるので、結婚という「契約」を盾にとってジークムントの不倫をなじります。なんとしたことか、神々の長であるヴォータンは、フリッカの言うがままになってジークムントを死なせます。ここでのフリッカのマルクス風でダーウイン風の「論調」が聞きものです。楽しみの多い第2幕をご期待ください。

都築正道



今日、私は、朝の8時から心臓のカテーテル検査をいたしました。12月14日は亡父の命日で赤穂浪士の討ち入りの日です。運命を感じます。心筋梗塞になってちょうど一年になったので、そのとき手術を受けた八事の日赤病院で一時間半の検査です。今回の検査は、左手の手首から「管」(カテーテル)を心臓まで通し、その後の心臓の状態を調べる検査です。「手首から心臓までカテーテルだって？」と聞いただけで身体が震えます。異常があれば再手術です。それで昨日は一日中、緊張していました。少々、恐いです。佳世が、「自殺する人は、お風呂で、右手にカミソリをもって、左の手首のちょうど同じところを切るのよ」とおどします。困ったものです。

おかげさまで、なんの問題もなく無事に検査を終えて帰宅いたしました。「先生、来週の月曜日にゴルフを誘われているのですが、行ってもよろしいでしょうか?」「ええ、大丈夫です。頑張ってください。暖かくしておでかけください」。次の検査は来年の11月21日だそうで予約をとりました。ドクターは、私がまだ一年は生きるものとみています。嬉しいです。